

鈴木花蓑礼賛詩集
はなにとふをんな 壺

薔薇色の暈して日あり浮氷

鈴木花簑

流氷

大海を

潮に運ばれ

辿りつく吾

絶壁に

待つ花あり

鳳仙花夕日に花の燃え落ちし 鈴木花簑

爪紅

恋心知らず

花で爪染め

実で白粉を塗り

化粧遊びした日

鳳仙花が弾けた

秋天や心のかげを如何せん

鈴木花簑

心のかげ

哀しい恋も

秘すれば花

明かせば煙

観えない心の

影の影

紫陽花の浅黄のままの月夜かな

鈴木花簑

天辻峠

浅黄のまま

色づくことも

変化するも

なかった初恋（こひ）

紫陽花街道に咲け

もつれつとけつつ春の雨の糸

鈴木花簑

天女の涙

徒雲の天女は

下界（ちまた）の恋に

涙する

哀しい恋に

涙する

闇ながらさだかに見えし今年竹

鈴木花簑

青竹

空気を破り

光吸ふ

おまへの勢い

鏑竹が

支へる

夕紅葉とみに水音澄みにけり

鈴木花簑

紅葉

おまへは

足りて散る

再来のため

ひとまずは

散りてゆく

白梅や蕊の黄解けて真盛り

鈴木花簑

白梅

梅花（はな）なきあと

主（ぬし）探す香り

喜びも

哀しみも

後から襲ふ

哀しくも美し秋の松時雨

鈴木花簑

秋時雨

湖畔の

遊歩道に

逍遙の幸せ

あなたを思い出す

幸せがある

同舟の人の見付けし蜃気楼

鈴木花簑

海市

沖に揺れる

あの町に

人は住まない

恋人たちの

願いが住む

蹴ちらしてまばゆき銀杏落葉かな

鈴木花簑

変化

あなたと

一等鮮やかな

葉を葉にした日

挟んだのは夢

褐色の粉と化す

蒼白く夕かげりたる辛夷かな

鈴木花簑

辛夷

色の彩

香の高さ

競う園に

やや離れて

白い辛夷

朝顔や静かに霧の當る音

鈴木花簑

朝の道

明けきらぬ

心抱えて

ひた歩き

戻り来ぬ

静かな家に

湯ざめしてある夜の妻の美しく

鈴木花簑

写生

黒髪を

梳るは

銀の櫛

妻の絵姿

愛が描かせる

芍薬や芯の心まで真紅にて

鈴木花簑

九十九夜

赤芍薬

白芍薬

小町の為に

植える少将

愛は明日咲く

夕焼けや生きてある身のさびしさを

鈴木花簑

巨匠

日夜奏でられた

ピアノの沈黙

黒鍵が悲しんでいる

地に光を纏わせた人

ついに自ら星となる

鈴木真砂女礼賛詩集
はなにとふをんな 弐

遠き遠き恋が見ゆるよ冬の浪

鈴木真砂女

浪の果て

水平線に

浮かぶ稜線

向かわねば

消えゆくのみ

この恋も

片恋の歌留多に負けてしまひけり

鈴木真砂女

片恋

いつも

真剣で戦った

わたしの恋

負けて悔いなし

撫子の恋

逢ふよりも逢へぬ月日や草の花

鈴木真砂女

朝露

誓わぬひとを

待つ愚かしさ

朝露のごと

ふつと消ゆる

ひとり思い

とほのくは愛のみならず夕螢

鈴木真砂女

夕螢

哀しくなるほど

愛した日々も

遠のいて

いま明滅する

夏川原の螢

心いまだ燃ゆものあり初鏡

鈴木真砂女

恋鏡

この鏡には

何も隠せず

嫌がる心を強い

瞳に燻るもの

じっと見る

夏帯や一途といふは美しく 鈴木真砂女

祭の夜

いのちの光

集めに集め

貴方を

焦がした

祭の夜

羅（うすもの）やひとを悲します恋をして

鈴木真砂女

呼び名

呼び古され

書きつくされ

祈られし

わが名

まりこ

口きいてくれず冬濤見てばかり

鈴木真砂女

冬日

薄皮を

剥ぐように

遠のく冬日

そのように

愛の記憶

鏡台にぬきし指輪や花の雨 鈴木真砂女

黒い雲

心の雲が

黒く湧き

ひとり

さくらを

喜ばず

罪障の深き寒紅濃かりけり

鈴木真砂女

勝利

枯れた花の

房に実あり

熟した実の

種に核あり

無常に克つ

あるときは船より 高き卯浪かな

鈴木真砂女

船の墓場

大浪の

勢いのまま

砂浜に

乗り上げる船

密かな凱歌

幸は逃げていくもの紺浴衣

鈴木真砂女

金の鈴

心のなかに

金の鈴あり

そのなかに

宝あり

振れば音する

恋いを得て虫は草に沈みけり

鈴木真砂女

やさしき土

雨のみで

花は落ちず

やさしき土

臥所を恋うて

そこに落つ

死なうかと囁かれしは蛍の夜

鈴木真砂女

不信

この場

この時

言葉など

信じない

わたしは生きる

蛍籠さびしきままに眠るべし

鈴木真砂女

夜の沼

わが心は

夜の沼

水底に

揺れて咲く

光の紫陽花

春の夢覚めてあしたもこの夢を 鈴木真砂女

ろくろ

夢のなか

陶土こねる

あなたがいた

広い背中が

安らいでいた

恋遂げし蛍ゆっくり夜明け待つ

鈴木真砂女

群蝶

ふたり

歩けば

群蝶が

道を譲る

春昼の一刻

鴨引くや人生うしろふりむくな

鈴木真砂女

ひまわり

ひまわり

立ち枯れて

不動明王のごと

種油こそ

未来の動力

阿波野青畝礼賛詩集

はなにとふをんな 参

まっすぐに飛びゆきがたし秋の蝶

阿波野青畝

川遊び

石ころを

拾い

投げ

蹴って

帰った

翡翠研ぐ石冷やかに割れにけり

阿波野青畝

翡翠

糸魚川

波が色止めする

五色の石

翡翠だけが

星となる

乱心のごとき真夏の蝶を見よ

阿波野青畝

舞踏

わたし

心冷めたら

舞えないと

乱れる蝶の

影の忙しく

立ち並ぶ柳どれかは散りいそぐ

阿波野青畝

出町柳

青白い街灯（あかり）に

柳が揺れている

わたしの脆弱（フラジル）な言葉は

何を散り急いでか

初秋の風となる

滴りに石筍を打ち我を打ち

阿波野青畝

石筍

「この一滴が
こう成るのか」
異形の石筍は
静かに云う
「お前の一滴は何だ」

みのむしの此奴は萩の花衣

阿波野青畝

黒子

「あんた衣装もちになるえ

盆の窪に黒子（ほくろ）あるし」

母の声に

そっと項に触れた頃

いまだ実物を見ず

かげぼふしこもりゐるなりうすら繭

阿波野青畝

恋の死

動脈を

縛る糸か

ただ

青く死す

恋哀し

思川白きもの立て夏祓い

阿波野青畝

別れ

月下の

山門に

青葉の息れ

ひとつの

別れあり

灯をめぐり灯のまぼろしや誘蛾灯

阿波野青畝

古手紙

それは

秘密の洞窟

その奥に

隠して

光にあてず

蓮破る雨に力の加わりて

阿波野青畝

硝子ペン

硝子ペン

振れの先に

吸われゆく

今日の思いは

月しづく色

死の雨か摘まれし苺やはらかに

阿波野青畝

山桜

汚れを

見せず

浪江の桜

いささかも

変わらず

夢枕多美子ならずや濃紫陽花 阿波野青畝

句碑

句碑よりも

歌い継がれよ

永らえよ

傷痕愛し

薄玻璃の恋

毒ならば美しくあれ芥子を見る

阿波野青畝

赤い芥子

毒であれ

薬であれ

芥子はしらない

紺碧の空は

この花のため

旅空に星くづまなき百夜かな

阿波野青畝

蜘蛛

蜘蛛に恩あり

この蝶は

生き延びぬ

硝子に彫りて

絵語りさせむ

蠮螋や死にも果てずにはつ時雨

阿波野青畝

江戸切子

わが恋も

かくありたし

江戸切子

藍を被せて

研ぎ磨きをり

凍鶴が羽ひろげたるめでたさよ

阿波野青畝

白魔

凍て死につ

雛守りたる

父鶴の

翼の根元

なお温かき

よき雲やしずかに月をさしはさみ

阿波野青畝

水晶洞

水晶洞は

光のドーム

言の寺

拝みいただく

詩もありて

そこここにあそべる蝶も霧に馴れ

阿波野青畝

気紛れ

思わぬ方へ

下りた蝶

どの花も

よきかたち

よきにほひ

仙田洋子礼賛詩集

はなにとふをんな 四

へだたりにまかす恋あり藤の花

仙田洋子

春

春や春

小鳥忙しく

さえずりぬ

歌わぬ一羽

胸郭の張る

水澄めりほろびぬ恋を胸に抱く

仙田洋子

天空湖

星降れば

音を消しつつ

波のまま凍る

西蔵の天空湖

鳥も歌わず

逃水や明日には明日の詩がある

仙田洋子

新年

新玉の

年のはじめに

身を正し

真の言に

すがりつく

かなしみも冬の紅葉も集め焚く

仙田洋子

忍ぶ恋

忍ぶ恋

蓮の花弁は

厚くして

時が来たれば

自ら開く

光ることはかなしむことや花すすき

仙田洋子

悟り顔

望みだけは

棄つるなど

宣うきみは

たおやかな

悟り顔

星々の磨きぬかれて冬至かな

仙田洋子

冬至

氷しか

尽きしか

それとも

忍びてか

音無の滝

夏嶺ゆき恋する力限りなし

仙田洋子

竜巻

この竜巻

身一つでは

巻き込めず

行き違いし

二筋の熱風

夜光虫恋には恋のあかし欲し

仙田洋子

聖夜

互いの

贈物を手に

ひとつの影

シリウスが

祝福の瞬き

存分にしだれて月の桜かな

仙田洋子

嫁す

櫛ひとつ

鏡台にあり

女なき

部屋にあり

愛梳きあげて

実むらさきほどの恋ならこのさきも

仙田洋子

ウラニウム

ウランには

何も罪なし

硝子に混じり

灰かに光る

紅茶碗あり

天無限恋も無限や濃はまなす

仙田洋子

戦慄

原子爆弾

忘れまじ

原発事故

忘れまじ

荒廃の戦慄

雪溪に蝶くちづけてみたりけり

仙田洋子

氷河

時を

重ねて

圧すると

青く光り

崩落するも

雪はげし生まるる言葉宙に消え

仙田洋子

白幻

心配すな

最後には

戻りつく

雪の道に

声は消されて

つんとせし乳房を抱く月朧

仙田洋子

棘

薔薇の棘

深く刺して

抜けぬ鈎針

痛みすら

所有の歡び

寒ざくら涙の粒の揃ひけり

仙田洋子

櫛ひとつ

櫛ひとつ

鏡台にあり

女なき

部屋にあり

愛梳きあげて

夏蝶は砂漠の影に入らず舞ふ

仙田洋子

最終章

薔薇を読む

悲恋の行方

最終章は

最後の言葉は

誰も知らない

原コウ子礼賛詩集

はなにとふをんな 五

蛍火の飛ぶ一つだに合寄らず

原コウ子

獲物

半ば開かれ

薔薇の書は

言葉の香り

揮発を抑え

獲物を待つ

花屑にまみれしままの若緑

原コウ子

蓮の王女

たちのぼる

朝霧に笑む

蓮の王女たち

色爪のさき

暈しを競う

紅梅にしづ心なく人に酔ふ

原コウ子

蓮の女

アオザイの

蓮の香りの

女ならば

桃源郷への

道を知るかも

もろ肌をつつみ臥す夜の渡鳥 原コウ子

桔梗

恋心が

充満す

桔梗も

美しく

裂ける

花野にて鴉のごとき老ひとり 原コウ子

毘沙門天

威風堂々

無敵の気合が

あたりを圧する

この弱きころ

守りたまへ

海の紺ある時白し夏ひばり 原コウ子

薄氷

厳寒期

淀めば凍る

いのち川

薄氷なら

指でも割れる

初冬のところに保つ色や何 原コウ子

無音

雪あかりに

真夜中を歩く

白無垢の

京都の家並

無音に酔う

青葡萄太る一途にしずまれり 原コウ子

千羽鶴

千羽鶴をば

糸から放てよ

祈りを背に

羽ばたいて

空へと向かう

渡り鳥野の十字路に女佇つ 原コウ子

春

もうすぐ春

誰にも春

人生の一瞬に

弱い光あり

美しい影あり

田植田を来て美しき蔵に逢ふ 原コウ子

盃蘭盆

お盆には

必ず針もつ

我の指

亡母が

縫わせる

うつむきて静かな悲願お茶の花 原コウ子

白萩

満月に

竹騒ぐ

花零す

白萩の

影疾し

句を読めば昔たふとき初暦 原コウ子

雪崩

書類の山が

音を立てて

崩れた

雪崩るものは

雪崩れよ

月白に羽もつ雲のかゝりけり 原コウ子

柿の花

芳しい

白小花

黒土に

輪を描く

両手に掬ふ

窓ありて水美しき初茜 原コウ子

命綱

命綱なしに

よくぞ

ここまで

渡りたる

見返る怖さ

わがいのち知らぬ我かも濃山吹 原コウ子

マリモ

湖底には

マリモあり

その眠り

守るひと

美しい絆

わが心に白波たてて海見る夏 原コウ子

檸檬

檸檬の花

香る港へ

滑り入る

巨船並ぶ

壮観図よ

夏海をことばの如く引きし波 原コウ子

海人

海に果つ

妻を探して

海に入る

海人の耳に

懐かしの声

